

また、葉の先端から1cm毎に1~2mmの菌叢片をつけて同様な方法で発病を調査したところ、発病率は第1葉27.4%、第2葉46.7%、第3葉50%であり、1枚の葉については第1葉と第2葉では先端と中央部に多く、第3葉では先端に多かつた。
次に、7分の1坪のコンクリート框に播種したオオ

ムギ会津5号に自然に発病したウンモン病について同様の方法で調査したところ第2表のようになり若い葉に発病が少く、老熟するにつれて病斑が増加するようである。1枚の葉については先ず先端部に病斑ができ、それが逐次基部に向つて擴がつてゆくようである。

大麦ウンモン(雲紋)病菌分生胞子の飛散

池屋重吉・田村実

(石川県農事試験場)

大麦ウンモン病菌の分生胞子が孢子採集器に入るのは、大体平均気温が5~15°Cの2月下旬から4月上旬までが最も多く、その後や越冬前は少かつた。そして風雨の日だけに採集できて、それ以外の日には入らなかつた。

病斑のある葉を水で濡らすと、分生胞子は直ちに多数流出するのがみられた。そして風速4.39m/秒の場

合、病斑が乾燥していても水で濡れていても胞子は飛ばないが、病斑のあるオオムギに水を撒きながら風を送ると胞子は飛散することができる。またその場合撒いた水の飛沫にも胞子が含まれていることがある。尚、スライドを地上10cmの高さに逆さに取りつけておいたところ、降雨の時に限つて非常に多くの胞子を採集することができた。

麦のサビ病及びシラシブ病薬剤防除の経済的効果

市川久雄・宮入芳明・原田敏男・黒岩匡

(長野県農業試験場)

昭和29年度に、ムギのサビ病とシラシブ病を対象とした集団薬剤防除を行つてその経済的効果を調べてみた。実施地は次の6カ所である。

A. 更級郡の水田二毛作地帯(平坦地)。B. 下伊那郡の水田二毛作地帯(平坦地)。C. 東筑摩郡の平坦畑

作地帯(平坦地)。D. 小県郡の高冷畑作地帯(傾斜地)。E. 諏訪郡の高冷畑作地帯(平坦地)。F. 上水内郡の傾斜畑作地帯(急傾斜地)。

使用した薬剤は石灰硫黄合剤 50倍液, 同 100倍液, 有機硫黄水和剤(ダイセン) 400倍液, 有機硫黄粉剤

第1表 地帯及び薬剤別反当経費と労力(コムギ)

薬	剤	地帯		A	B	C	D	E	F	平均
		反	当							
石灰硫黄合剤	50倍液	経	費	392	969	556	558	313	887	613
		労	力	0.80	2.21	1.02	1.11	1.00	2.53	1.45
石灰硫黄合剤	100倍液	経	費	312	874	476	496	291	781	535
		労	力	0.80	2.34	1.02	1.15	0.97	2.43	1.45
ダイセン水和剤	400倍液	経	費	1343	1912	1578	1505	1637	1693	1611
		労	力	0.80	2.35	1.01	1.17	1.91	2.10	1.56
ダイセン粉剤		経	費	1165	1365	1244	1105	1058	1059	1166
		労	力	0.02	0.75	0.32	0.09	0.24	0.02	0.24